旧広島市域における厳島管絃祭にまつわる祭礼行事について

――近代における高ちょうちん・火振り・御供船の様相と新祭礼行事の発生――

中　道　豪　一

（受付　2018 年 10 月 31 日）

要　　旨

本稿は原子爆弾投下によって失われた旧広島市域の生活文化について，神道を中心とする宗教民俗・宗教文化の側面から考察を加えたものである。その特徴は，考察に当たり，旧暦６月17日前後における世界遺産厳島神社（広島県廿日市市宮島町）管絃祭にまつわる祭礼行事に焦点を絞った点にある。

なぜ旧暦６月17日前後における管絃祭にまつわる祭礼行事が注力すべき素材になり得るかというと，旧暦６月17日が世界遺産厳島神社において管絃祭が執り行われる日であり，その管絃祭に合わせ旧広島市域においても，関連する各種祭礼行事が盛大に行われていたからである。

管絃祭とは広島地域において最大の規模をほこると称された祭礼行事である。その内容は，旧暦６月17日夜，伶人を乗せた管絃船が，御祭神を慰めるため楽を奏しながら宮島を出発し，対岸の地御前を経由して，宮島へ戻ってくるアクションを主軸としており，多くの人々がその姿を見るため参集する。

この管絃祭については，世界遺産厳島神社の宮司を務めた野坂元定「厳島神社の神事と芸能」（『厳島民俗資料緊急調査報告書』広島県教育委員会 宮島町 昭和47）等の成果があるが，旧広島市域における旧暦６月17日関連の祭礼行事に関しては，『広島市史』『新修広島市史』[i] といった地方史を別にすると，西村晃「厳島神社管絃祭御供船をめぐって――広島県城下町祭礼断章――」（広島県立文書館編『広島県立文書館紀要』９ 平成19）による御供船の考察が存在する以外，先行研究は極めて乏しい状況である。そもそも旧広島市域における宗教民俗を扱った研究も少ないといった事情もあり，本稿には世界遺産厳島神社の管絃祭に関する信仰や習俗の実態を解明するといった意義と共に，旧広島市内における民俗文化・宗教文化の実態を解明する意義が認められる。

具体的な考察にあたっては研究の空白期間である近代に焦点を絞った。『知新集』等近世の基礎文献と西村の業績を受け，明治以降の様子を『中国新聞』『芸備日日新聞』といった地元紙，原爆投下前の広島の姿をつづった小鷹狩元凱・薄田太郎らの著述や各種証言を踏まえ，誓願寺境内の厳島大明神・橋本町の厳島神社・市内各所に揚げられた高ちょうちん・白島と牛田の川原における火振り・京橋川や本川などに浮かべられた御供船・市内数か所で行われた玉取祭など具体的な事例を抽出し，個別の実像を把握するだけではなく，全体像を俯瞰できるよう配慮した。

なお事例の分析については主に２点の成果を挙げた。１点目は，西村が江戸時代の城下町における町人の活力が御供船から別の対象に移ったことを指摘したように，明治末年にも御供船から玉取祭（玉取）や広島管絃祭という形で，祭礼に関するエネルギーがシフトした事実を指摘した点，２点目が「旧暦６月17日における世界遺産厳島神社管絃祭にまつわる祭礼行事」という観点を持たないと，事例を正しく分析できないうえに，誤った分析をも許容してしまうことを指摘した点である。

1　はじめに　――平和記念公園と嚴島大明神――

広島県広島市が人類初の原子爆弾被害を受けた地であることは周知の通りである。平成 8 年に世界遺産登録された原爆ドーム，被爆の実相を伝える広島平和記念資料館，毎年 8 月 6 日に式典が催される平和記念公園は毎年多数の来訪者や観光客を受けいれている。その他にも隣接する廿日市市の世界遺産嚴島神社・広島東洋カープといった魅力的な現地資源も存在することから，観光客数も平成29年には 7 年連続で過去最高を更新し341万 4 千人に達した。

そうした状況にある広島市だが，平成31年は記念の年を迎える。江戸時代，長期にわたり広島を統治した浅野氏が広島城に入って，ちょうど400年の節目の年にあたるのである。それにあたり広島市は浅野入城400年記念事業を企画し歴史講座を開講，広島市経済観光局観光政策部は『広島の歴史をたどるまち歩きマップ』といったリーフレットを発行するなど，種々の啓蒙・広報活動を展開している。また公益財団法人広島市文化財団広島城をはじめ，関係する各種団体においても様々な企画が計画・実施されており，行政側の関心を伺うことができる。

上記の状況を俯瞰する限り，歴史研究に携わる者としては，それら試みに協力することが望まれようし，私自身，研究活動を通し関連する啓蒙・広報活動に参画している側面がある。しかしそうした活動に接していると，広島の歴史に関する催しや活動において，大きな問題点が存在していると指摘せざるを得ない。それは民俗学で扱われるような「民衆の生活や文化にスポットを当てた研究や，そうした成果の広報」が乏しいということである。

例えば平成28年に上映され，大きな反響を呼んだアニメ映画「この世界の片隅に」を例にとり考えたい。原作者こうの史代による物語・作画が秀逸であったことは勿論だが，広島において大きな関心の寄せられた要素の一つに，原爆で失われた日常の風景が描写されていることがあった。監督の片淵須直が調査して描き出した，物語の舞台となる戦前の広島と呉の風景は多くの関係者を驚かせた。また主人公すずを通して描かれる日常は，ステレオタイプで表現されることの多い戦前という時代にアプローチする新たな観点を提供したといえよう。無論，この作品は江戸や明治ではなく昭和前期の話であるが，広島における反応を見ると，「民衆の生活や文化にスポットを当てた研究や，そうした成果の広報」の乏しいことを象徴する側面があったように思われる。

広島において歴史というと，昭和20年 8 月 6 日に投下された原子爆弾に関する内容が大きなウエイトを占めることは周知の通りである。数万人の人命と浅野入城以前，すなわち毛利・福島時代から築かれてきた町並みが灰燼に帰したことを考えると当然である。しかし，それを重んじるが故に，積極的にも消極的にも「民衆の生活や文化にスポットを当てた研究や，

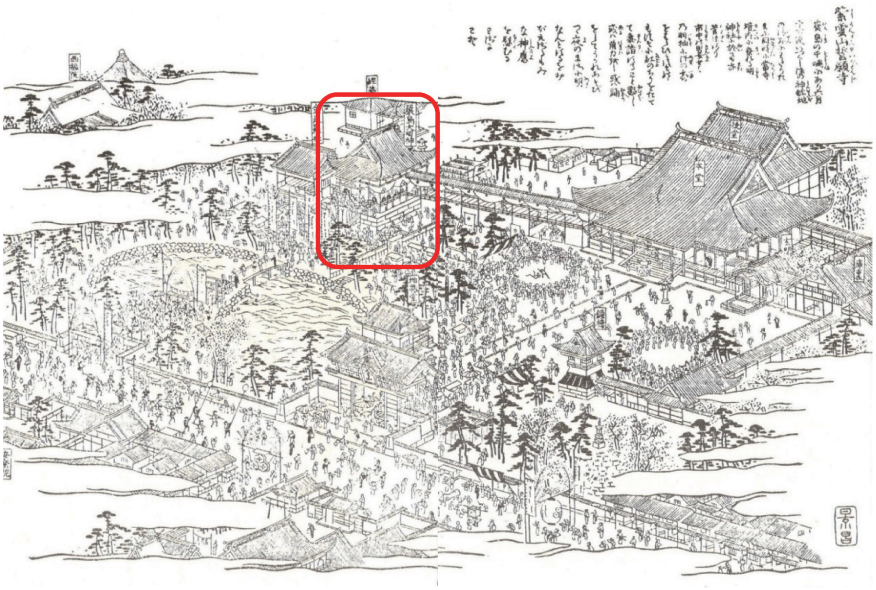
そうした成果の広報」に注ぐ労力が後回しにされてきた可能性がある。積極的には原子爆弾に関する方面への注力であり，消極的には原子爆弾で人命をはじめ史料や施設が失われてしまった事実と，その事実にまつわる感情を配慮して後回しにしてしまう態度があったのではないか。

上記分析を裏付ける事例が，広島市中区にある平和記念公園と嚴島神社の関係である。これを簡単に説明すると，現在の平和記念公園，それも平和大通り沿いにある祈りの泉付近に嚴島神社が祀られており，祭りの日（旧暦６月17日）には多くの人が集まり祈りを捧げた有名な場所であったという事実が，殆ど伝えられていない，という状況を指す。ここでいう嚴島神社とは，正確には嚴島大明神という名称だが，それは勿論，世界遺産嚴島神社のことではない。現在の平和記念公園内に存在した誓願寺の境内にあった神社のことである。現在の広島において旧暦６月17日という日にちが話題となることは少ない。しかし，この日は世界遺産嚴島神社における重要祭礼管絃祭の日であり，市内各地において盛大な祭礼行事が行われる日だった。要するに民衆の生活や文化に焦点を絞り，広島の歴史を考える際，絶対に見逃すことのできない日・事象なのである。340万人を超える観光客を受け入れ，浅野入城400年にあたり各種催しが企画される中，上記事実が大きく取り上げられたことは管見の限り確認できない。「民衆の生活や文化にスポットを当てた研究や，そうした成果の広報」が乏しいと分析するのは，こうした事実が根拠となっている。この事例をもう少し具体的に掘り下げてみよう。

【図１】[ii] は『藝州嚴島図絵』巻５に記された誓願寺という寺院だが，多くの人で賑わっていることを確認できる。これは旧暦６月17日，すなわち管絃祭の当日を描いたものであり，その宗教的中心となる存在が池の傍に鎮座する嚴島大明神の社（図中の赤枠で囲んだもの）である。この史料自体は特殊なものではないが，この誓願寺と嚴島大明神のあった場所が現在どうなっているかが重要である。

それを確認する為，中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターが公開している「平和記念公園（爆心地）街並み復元図」【図２】を参照する[iii]。現在の広島市街地を撮影した写真上に，原爆投下前の住居地図が書き加えられており，現在の平和記念公園一帯に何が存在していたかが一目で分かるような作りになっているわけだが，画面中央やや右にある祈りの泉付近に「ひょうたん池」という名称が確認できる。そしてその左下に「厳島大明神」との記載があるが，この場所こそ【図１】『藝州嚴島図絵』巻５で示した厳島大明神なのである。

つまり【図１】は現在の平和記念公園を東から俯瞰していることがわかり，【図１】の左上には現在平和大通りが走っているといった位置関係が把握できる。ゴールデンウイークに開催されるフラワーフェスティバルでは花の塔が設けられ，８月６日に行われる平和記念式典で多くの人が訪れるこの場所が，かつての広島人たちが嚴島の神に祈りをささげた場所であ



【図 1 】　紫雲山誓願寺
『日本名所圖會全集 藝州嚴島図絵 上巻』（名著普及会 昭和50）P436～437

【図 2 】「平和記念公園（爆心地）街並み復元図」
http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?page_id=25623

ることを，現代の広島において誰が語り伝えているのであろうか。

原子爆弾で破壊される前の広島の姿を『がんす横丁』を始めとする著述で丹念に描写した薄田太郎は，この誓願寺嚴島大明神の祭礼の様子を「景昌が描いた当夜の風景は原爆前に見

たままの姿であったことを思い出す」[iv] と『続がんす横丁』で回顧する。その詳細を以下に挙げる。

> 本堂の屋根が高いのもこの寺の特色であったが，玄関前の広場には踊りの輪が描かれて，踊り子が手に白扇を持っているあたりには，**筆者たちがこども時代に見かけた盆踊り風景と少しも変わらないもの**であった。踊りの輪の近くに見られる鐘楼も，**原爆前に見かけたそのままの建物**であった。池の近くにあった三間（約五 . 五メートル）に三尺（九十センチ）の地蔵堂も思いだされる。本堂前の石畳を右にながめるあたりにはこども中心の相撲の輪が見られ，その後方には揚弓場二ヶ所が見られるのもこの誓願寺風景の一つであった。石畳で囲まれた池にはたくさんのカメが浮いていて，池の上に架けられた長さ四間（約七 . 三メートル）幅五尺（一 . 五メートル）の石橋も忘れられないが，高さ八尺（二 . 四メートル）の宮島型鳥居も厳島大明神の特色だった[v]

揚弓とは的に弓を当てる遊戯のことだが，その揚弓場をはじめとする江戸時代の光景が薄田の子供時代にも残っていたとは，いささか驚きを禁じ得ない。薄田は明治35（1902）年生まれなので，「こども時代」というのは，記憶が正しければ明治末頃の光景となる。薄田のような詳しい証言は，なかなか残っていないものの広島の地方新聞『中国新聞』も盛況ぶりを伝えている。数例を以下に挙げる。

> 橋本町の明神社，**材木町誓願寺内の同社**は本日より祭事を行へば，女子参詣して雑沓を見る事なるべし　（明治29年７月26日）
> 市内材木町誓願寺では例年の如く来る二十九, 三十の両日，**鎮守嚴島明神の管絃祭**を行ひ青山流石谷社中活花会，盆踊り，其他，狂言等の奉納あり。非常に賑ふたらうと（大正12年７月27日）

なお原爆投下前の誓願寺の写真は『広島市史　社寺誌』，広島市西区に移転した誓願寺のHP で閲覧することができ，原爆投下２か月後を撮影したと思われるアメリカ国立公文書館が所蔵する平和記念公園建設前の嚴島大明神跡の写真は，平成28年10月10日の『中国新聞』が報じ，現在は web でも閲覧できる[vi]。また誓願寺に関しては，境内に無得幼稚園があったことから，懐かしい想い出と共に回顧され，聞き取りにおいても日常の風景と共に語り起こされている状況があり，（中川幹朗編『証言　記憶の中に生きる町　中島本町・材木町・天神町・猿楽町』平成27など）嚴島大明神以外の事例においても，注意を払うべき対象である。

以上のように誓願寺の嚴島大明神の事例に関しては，かつての広島において重要な場所で

あり，かつ現代においても容易にアクセス可能な情報であるにも関わらず，認識されていない状況を指摘することができるのである。しばしば巷間において「広島市中心部で歴史的に誇れるものは広島城くらいしかない」という冗談交じりの言を耳にすることがあるが，それは「ない」のではなく「知らない」のではあるまいか。嚴島神社を崇敬した人々が生きた町で，後世その場所に住む人々がその事実を知らず，世界遺産として評価される嚴島神社との関わりを郷土の資産として活用できていない現況は皮肉というほかない。かつての姿が認識できていない例を挙げるならば，誓願寺の北側，現在の国際会議場そばにあり篤い信仰を集めた妙法寺のかさもり大明神，平和記念公園内の平和乃観音像付近にあった巨大な涅槃図で有名な慈仙寺も同様である。そして，こうした事例が，その存在すら語られない現状は「民衆の生活や文化にスポットを当てた研究や，そうした成果の広報が乏しい」状況を明示していると考えられる。

旧広島市域や，近世における広島城下についての先行研究は『広島市史』（広島市 大正11～14），『広島県史』（広島県 昭和43～59），『新修広島市史』（広島市 昭和33～37），『図説広島市史』（広島市 平成元），『概観広島市史』（広島市 昭和30）等の自治体史をはじめ多くの成果が存在し，近年においても土井作治『広島藩』（吉川弘文館 平成27）など業績が蓄積されている。そうした中，本稿の位置づけは政治・経済ではなく，神道学・民俗学の角度から生活・文化の領域にアプローチを試みるものである。以下，旧広島市内における嚴島管絃祭にまつわる祭礼行事の姿を指摘していきたい。

2　忘れられた旧暦 6 月17日の風景 1　――厳島管絃祭と高ちょうちん――

そもそも世界遺産嚴島神社で行われる管絃祭とは何か。嚴島神社による説明としては『伊都岐島』（改訂版 厳島神社社務所 平成７），詳細なものとしては野坂元定「厳島神社の神事と芸能」（『厳島民俗資料緊急調査報告書』広島県教育委員会 宮島町 昭和47）の「管絃祭　附居管絃祭」や，その記述に野坂元良の修正と福田道憲の写真を加えた「写真構成・管絃祭のすべて」（野坂元良編『嚴島信仰事典』戎光祥出版 平成14）が適当だが，ここでは『嚴嶋』（厳島神社）の説明を挙げる。

> 雅楽管絃が平清盛によって厳島神社に移され，それ以後毎年旧暦六月一七日夜に，厳島神社及び海岸鎮座の摂末社の前でこれを奏し，御神慮を慰め奉ることとした。明治十四年からは御座船に御鳳輦を乗せて海上渡御の形となった。三伏の候だが，夕刻から夜半に至る祭典だから，拝観参拝の群は海といわず，陸といわず，大変な数に上り，関西有数の盛儀である[vii]

ここから嚴島神社に祀られる御祭神の御神慮を慰める為，管絃を奏することが管絃祭の要点と理解できる。上掲の引用部について補足すると，三伏の候とは新暦７月中旬から８月上旬にかけての酷暑の時期を指す語で，一般的には夏至以降の３・４回目の庚の日から，立秋をこえた最初の庚の日までの期間を意味する。なぜ管絃祭の祭日が三伏の候に定まったかというと，旧暦７～９月は潮位の高い時期にあたる為，吃水の深い大船を用いる管絃祭には都合がよいことを野坂元定は指摘している。しかし台風を避ける為，それに先立つ６月が選ばれ，さらに月明かりがあり潮位の高い時期を必要とすることから17日が選定されたと説明を加える。現代における管絃祭の次第については『伊都岐島』が示す説明を下に挙げる。

> 御鳳輦を奉舁して大鳥居沖の御船まで御供し，御船に移御が終ると先ず「大鳥居前の儀」があり，献饌祝詞奏上後管絃があり，終って漕船によって地御前に向う。そこでの管絃は昔のように三曲ある。長浜神社前での祭典管絃が終ると，そのまま大元神社へ向い，そこでの祭典管絃を終って御本社前に帰ることとなった。枡形の管絃が終ると火焼前から奉舁して御本社に，遷御の事を終って終了することとなる[viii]。

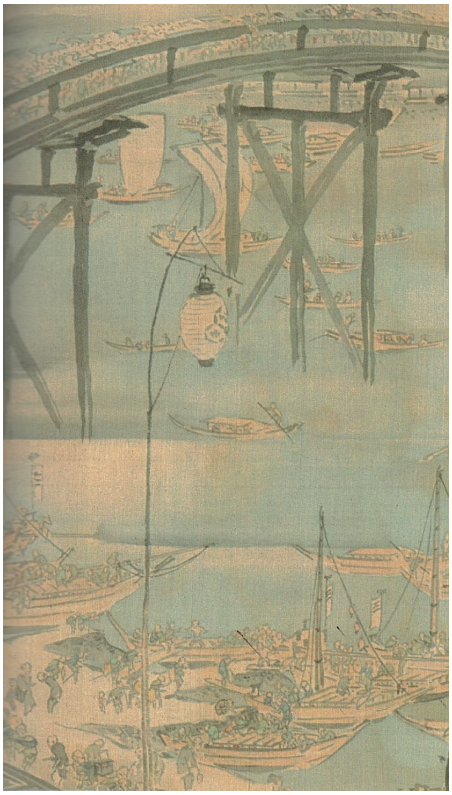
本年平成30年は台風12号の影響により，明治天皇の崩御された明治45年以来106年ぶりの中止となったものの，例年は旧暦６月17日の夕刻から深夜にかけて上記の次第が執り行われる。なお御祭神を御鳳輦に遷し御座船（管絃船）に乗せるのは明治14年以降のことで，それまでは御祭神を船に乗せていない。また「対岸にいらっしゃる御祭神を迎えにいく」という説もあるが，祭神移動に伴う祭儀を確認できない為，信仰の一面を表現した説ではあれど，祭祀から実像を考察する祭祀学の観点からは首肯し難い[ix]うえに，そもそも嚴島神社では，そうした説を採っていない。

この世界遺産嚴島神社で管絃祭の行われる旧暦６月17日あたりは，県内各地においても管絃祭，もしくはそれにまつわる神事や祭礼行事が行われる[x]。それは旧広島市域においても例外ではなく，管絃祭は重要かつ盛大な祭りとして捉えられ，ある者は宮島まで足をのばして参拝し，またある者は生活の場から崇敬の念を表した。考察範囲を旧広島市域に焦点を絞る本稿は，後者の姿に注目するわけだが，そこでまず挙げたいのが，薄田太郎のいうところの「高とうろう」である。後に挙げる御供船の記述に続き，薄田は旧暦６月17日における「高とうろう」のある町の風景を以下の様に描写する。

> 京橋川に御供船が飾られる夜は，橋のランカンに町名入りの大ちょうちんが立てられ，また民家の屋根高く，いわゆる**宮島さんへの「おあかり」といわれる「高とうろう」**が掲げられて，錦絵に見られるような古風な夜景が見られた。この「高とうろう」は，家が

それぞれの定紋を入れた弓張ちょうちんを，屋根の上に立てた竹につったもので，なかには一本の竹に横に長く十数個の弓張がつってある家もあった。思えばあのころの広島市民は，各家に一つ二つの定紋入り弓張ちょうちんを用意していた。旧家の入り口正面の壁には，白い色の紙箱が並べられ，その箱には黒色の定紋が描かれていた。平素はこの箱の中にちょうちんが納められていたもので，原爆後のヒロシマにみられないアクセサリーであった[xi]。

明治15年，三宅克吉が「廣島歳時記」（『鶏骨集』昭和５）に記した「尚当夜ハ各戸長竿ヲ立テ竿頭ニ錦燈ヲ釣リ遥二藻蘋ノ意ヲ致スヲ例トス　頗る美観ナリ　里俗之ヲ高燈籠ト称シ各自長竿ノ高キヲ競フ」[xii]や，明治29年７月26日付けの『中国新聞』が示した「嚴島明神を祭る家には例年の如く高く提燈を揚げ」といった街の風景だが，これは明治以降に限ったものではなく，江戸時代から見ることのできるものであった。例えば【図３】「塚本町雑踏之図」[xiii]には橋よりも高い弓張ちょうちんが設けられ，「六月十六夜廣島本川口の圖」（『日本名所圖會全集　藝州



【図３】「塚本町雑踏之図」
『図説広島市史』広島市 平成元 **P102**

嚴島図絵　上巻』上部の，町を描いた箇所にも，その姿を認めることができる[xiv]。また江戸末期に活躍した広島藩儒坂井虎山の漢詩「南望仙山不可登　想聞廟下管絃澄　家々遥致藻蘋意　争樹長竿揚錦燈」[xv]も，その様子を詠んだものであるし，熊見曲水「藝藩時代年中行事」にも「この祭にて三四夜の間は広島その他海辺の郡村とも竿頭高く燈をかかぐ」とある[xvi]。

「廣島歳時記」にある高さを競うとの記述，さらに【図３】「塚本町雑踏之図」を見る限り，なかなかの存在感を認めることができる。この「高とうろう」については，幕末の広島の街の様子を記録した小鷹狩元凱も以下の様に記している。

> 抑も同社の神霊は，全藩の尊崇弥高く，此宵は行処として，二丈三丈乃至は四五丈を維き合せの竹竿か，或は幾多の丸木をもて，**天をも衝ん高標**を作り，其最高所には**挑灯**を釣るし，市街は戸毎に神燈を掲げ，人々孰れも敬虔の意を表せざる者はなく（以下略）[xvii]

ここに２丈３丈乃至は４・５丈とあるが，１丈とは約３ｍであるから，街々には６ｍから15ｍの「高とうろう」が飾られていたことになる。路線バスの車高が約３ｍ，世界遺産嚴島神社の鳥居の高さが約16ｍであることを考えると，薄田・三宅・小鷹狩らがその姿をたたえ，坂井が漢詩に詠んだ意味も理解できよう。なお「高とうろう」だが，薄田の幼少期，すなわち明治末期から大正期頃には，その高さが低くなっていたようである。

> 幕末ころの記録によると，竹ざおを四,五丈（十二―五メートル）も継ぎ合わせ，ときには丸木を継いで天をもつかん高さにしてちょうちんが掲げられたというが，**著者のこどものころの記憶では，明治末期まで二丈（六メートル）から三丈（九メートル）の竹ざおに，弓張のちょうちんを結んで掲げてあった。**もちろんこのちょうちんにはろうそく，またはそのころ流行したばかりのガラスろうそく（カンテラ）を入れて，はるか宮島の嚴島明神への「おあかり」としたものである。夜空に明るく見えるこの高ちょうちんは，明治調最後の色彩というか，こども心にも錦絵風の夜景として焼きついていて忘れられないものである[xviii]。

こうした街の風景は新聞でもしばしば取り上げられている。一例を挙げても「嚴島明神を祭る家には例年の如く高く提燈を揚げて■明を供へぬ」（『中国新聞』明治29年７月26日），「例の飾提燈を出し又明神への献燈を揚げたるものは空の星と見違へらるゝ程」（『中国新聞』明治31年８月５日），「市中には概ね飾提燈を出しあり」（『中国新聞』，明治34年８月１日）「一昨日より来る三十日迄は毎年本市及び近郡の各村落にて高提灯と称する十間内外の竿頭に幣を立て灯を点じて立つる風習あり。本年も同じく之を立てたれば中々に賑はしかりき」（『中

国新聞』明治37年７月29日）といったように多数報じられており，「高とうろう」が，この日の広島市街に欠かせぬ事物であったことがわかる。

以上，旧暦６月17日の管絃祭にあたり，旧広島市域において厳島神社の神々を敬した灯り「高とうろう」が揚げられていたことを確認した。

3　忘れられた旧暦 6 月17日の風景 2　――火振り――

前掲の小鷹狩元凱は弘化３年（1846）に広島城下白島九軒町に生まれ，軍人・政治家という経歴を経て教育事業に尽力した人物で，様々な著述を残している。前項で挙げた「高とうろう」についての記述を引用した『自慢白島年中行事』もその著述の一つで，生まれ故郷である白島の美点を書き残したものだが，そこには「高とうろう」以外にも特筆すべき旧暦６月17日関連の事項がある。それが下に挙げる「九軒町磧の火振り」である。

> 蓬莱三宝清め給へと，日暮の頃より大声張り揚げ，**手には松明打振り打ふり**，神田橋をば中央に，此方は九軒町の堤下より，彼方は牛田の水中まで，**幾百千の壮幼男子縦横自在に闊歩を為し，空中火焔の漲る**は，両岸環堵の人面に，目まばゆき迄てり来り，恰も昼の如しとは，之を**九軒町磧の火振り**と称し，**毎年六月十七日，厳島神祠の管絃祭を，遥に敬し奉る**なり，抑も同社の神霊は，全藩の尊崇弥高く，此宵は行処として，二丈三丈乃至は四五丈を維き合せの竹竿か，或は幾多の丸木をもて，天をも衝ん高標を作り，其最高所には挑灯を釣るし，市街は戸毎に神燈を掲げ，人々孰れも敬虔の意を表せざる者はなく。材木町の誓願寺内と，京橋際とに鎮坐せる，同一神霊の祭典も，皆此日を以て行はるれば，参拝群集の雑沓は，言んかたなき慇賑なれど，要するに此夜各所の壮観も，九軒町磧の火振りには，過るものなき風情なり[xix]

上掲の文中にある牛田というのは，白島から京橋川を渡った地域の名称である。京橋川の河原に沿って何百何千の男子が，手に松明を持ち「蓬莱三宝清め給へ」と叫びながら行進する光景が示されているわけだが，小鷹狩によると，この主意は厳島神祠すなわち世界遺産厳島神社の管絃祭を遥かに敬することにあるという。

これに関連して『中国新聞』（大正４年７月28日）は「九軒町河原では特に拝殿を設け厳島管絃祭遥拝殿とする由。火振りは川中に篝火を焚き手頃の炬火を点じ音頭につれ前後左右に振り廻すものだと云ふ。尚ほ今夜は河田連の囃船も出ると云ふ」と，火を通して敬するに加え，拝殿を設けることを報じている。なお小鷹狩の記述から江戸末期には行われていたことがわかるものの，嚆矢は定かではない。ちなみにこの火振りは現在見ることのできないが，

【図４】「火振りの行事」
NHK 広島編『わがなつかしの広島』（広島地域社会研究所 昭和**55**）**P102**

大正末期頃まで続けられていたと言われている。その証言と，火振りに関する回顧を確認できるのが『わがなつかしの広島』（広島地域社会研究所 昭和55）に収録された三浦高雄の絵【図４】と説明文である。

> 白島九軒町河原の「火振りの行事」は旧藩時代から大正末期まで続けられたもので，毎年宮島の管絃祭（陰暦六月十七日）に行われ，この夜は大潮が川を遡って河原をひたすまでの行事で，時には千人以上の男の子や大人が松明を持ち，河原に降りて「蓬莱三宝清め給へ」と大声を張りあげ，厳島明神へおあかりを捧げ，今年の無事を祈念したということである[xx]。

この説明文に「大潮が川を遡って河原をひたすまでの行事」とあるが，絵を見ると川のすぐそばまで降りて松明を振っていることが分かり，行事の様子がよく分かる。この川が満ち河原をひたすまで…という記述に関連して見逃せない行事が２点ほどある。１点目は薄田太郎が『がんす夜話』で紹介した拝礼の姿である。潮が満ちてくる時間，宮島に向かい拍手を打つというのは興味深い。その姿を以下に示す。

> 高ちょうちんをあげた晩，**満潮時になるとはるか宮島の方に向かって祖父たちが柏手を打っていたこと**を思い出す。時刻としては厳島明神の管絃船が地御前に渡って還御になる

ころであった。この行事は旧藩時代から長年続けられてきて，明治，大正時代にその名残りが七つの川やあちこちの町に見られたものである[xxi]。

続く 2 点目が，満ちてくる潮を汲みとる所作であり小鷹狩元凱が『自慢白島年中行事』で管絃汐と呼称する行事である。「此夜広島の各川々へ，満ちくる汐を汲来り，家の間毎に清め撒く，又は人々戴き飲めり，明神様の加護を祈るが為とかや」[xxii] とある他，熊見曲水も「藝藩時代年中行事」で「十七日の夜かの船管絃のあるとおぼしきころ，広島及び海辺の郡村は皆川辺海辺に出でて潮をくみて家に持ちかへり，これを戴く，これを管絃潮と唱ふ」[xxiii] と記録しており，管絃祭の日，潮の満ち来るタイミングに合わせ拝礼・行事を行っていることは見逃し難い。管絃祭にあたり，宮島に渡航することはできないが，その居住地で神々を敬する文化・習俗として押さえておきたい。

4　忘れられた旧暦 6 月17日の風景 3　――御供船――

現在の世界遺産嚴島神社は主祭神として市杵島姫命・田心姫命・湍津姫命の三柱の神を祀っているが，この神々を認識する際，頻繁に明神という呼称が出て来る。神名を直接呼称せず，地名や別の呼称を用いる行為については，尊貴な存在を軽々しく口にすることを畏む意識をはじめ，親しみ・慣習・時代的流行・特定の思想等の事情を指摘できるが，明神という呼称もそうした事情に基づく呼称である。呼称の具体例としては，前掲の誓願寺境内「厳島大明神」や，橋本町嚴島神社の浜を「明神浜」と呼ぶことが挙げられる。ちなみに旧広島市域の旧暦 6 月17日を考える際，この橋本町嚴島神社も重要な地点である。なぜならばこの神社の前を流れる京橋川は，本川などの川と共に管絃祭のお供をする御供船で賑わった場所だからである。

御供船とは江戸時代に淵源をもつ旧広島市域から出される船のことで，世界遺産嚴島神社の管絃祭で出る管絃船のお供をする…という意識に基いた名称である。その始まりは『知新集』巻 4，白神組釣燈屋市兵衛の項に見ることが出来る。

> 又正徳元年の頃宮嶋棚守よりの頼に依て毎年六月十七日管弦船の雨具を寄進し手船にて供をす，是御供船の濫觴にて此雨具今ハ一町内の寄附となれり，其後鹽屋町より御供船と云事を初むといふ[xxiv]

この釣燈屋市兵衛は三代目にあたるというが，要するに嚴島神社の棚守が管絃船の雨具を三代目市兵衛に依頼したことが契機となり，お供の船を出すようになったことが御供船の始

まりとして記されている。この説明は『広島市史』『新修広島市史』『図説広島市の歴史』等にも採られているが，嚴島神社の２代前の宮司野坂元定は「厳島神社の神事と芸能」（『厳島民俗資料緊急調査報告書』広島県教育委員会 宮島町 1972）で興味深い話を紹介している。それは市兵衛が棚守から雨具，すなわち油単の調製を依頼されたものの，独力では不可能だったというもので，結局，油単製造に長けた油屋町の協力を得て桐油を発明し雨具開発を成功させた…というものである。なおこの説明は『広島市史』の，大阪より合羽製造職工を招致したとの説明と異なるものの，最終的に依頼を達成した，という大筋は共通している[xxv]。

その後，御供船を出す主体は市兵衛の暮らす紙屋町に移り，他の町々も御供船を出すこととなるが，その経緯を野坂は以下の様に説明している。

> 御神徳の高い厳島神社の最も殷賑を極める御祭礼に随従を許されたことは，数年に至る労苦に酬いられたもので，至極光栄である。之は他町の羨望の的であった。何とかして之に倣いたいという希望が起ったのは無理からぬことであろう。**紙屋町に程近い塩屋町が，先ず之に倣った。**紙屋町より数年後の享保年間に「御用御供船」と称するものを出して，管絃船に従った。が「御用」と称すべきものは何物もない。「水主の手代わりを準備する」ということを，御供船を出す理由としたらしい。が，実際には甚手持無沙汰のものである。**然し之が先例となって，何とか理由を附けて次から次と「御供船」を出すようになり，その船も美々しく飾り立てるようになった。**御用にならなくとも，このような船が数多く管絃船に随従すると，見た眼には美しい。船飾りにも種々工夫を凝らし，京都祇園会の鉾や山の装飾を取り入れたのもその為である[xxvi]。

検討すべき点も少なくないものの，『知新集』の記述に『広島市史』や野坂の記述を合わせ，伝承を大まかに理解するならば，以下のようになろう。そもそもは雨具調製という御用を果たし，雨具御用船として管絃船のお供をしたのは紙屋町の釣燈屋市兵衛だった。しかしその後，市兵衛の住む紙屋町が寄進するようになり，それをうらやましく思った紙屋町そばの鹽屋町が，御用の定かではない「御用御供船」という名称の船を出し，町々に広がっていった。

つまり御供船とは，釣燈屋市兵衛の御用を契機に他町の人々が，自分達も管絃祭と何らかの関与を持ちたいと考えた結果として生まれ，定着していったものと考えることができる。

管絃祭のお供をする御供船は，町単位で船を出すことと，他の祭礼にはないような特別な装飾が特徴で，最盛期には約100艘もの出船を見せたが，天明頃から衰退を見せ，明治初年頃には僅か数町の船しか見かけなくなってしまった。その後，大正から昭和初期頃まで姿を見せていたというが，明治以降，各所に橋が架けられたことで宮島への航行が難しくなったこ

と等の事情もあり，御供船は宮島に渡航する存在ではなく，川に浮かべられ管絃祭の賑わいを供する存在に変化していく。この辺りの事情について，野坂元定は大正の始め頃までは京橋川や本川に御供船が残っていたとの証言[xxvii]，『広島市の文化財――民俗文化財編――』は明治末期より下火になっていった証言[xxviii]，『わがなつかしの広島』は昭和のはじめまで存在していたとの証言を残している[xxix]。

御供船の渡航スケジュールは旧暦 6 月17日の夜までに渡島し，翌18日に旧市内へ戻ってくるというものである。管絃祭のため宮島へ移動する旅客を運搬する船も盛んであったが，そうした船とは性格の異なる点は押さえておかねばならない。主意はあくまで管絃船の御供をすることにある。そして内実はともかく，御供をする…という大義名分が，娯楽活動を展開する添え木となり，観光を通した経済活動につながっていた点も見逃し難い。江戸期，18日に戻ってくる御供船を迎えた迎え船，明治期，管絃祭の戻り客のため御供船を川に浮かべていたというのはその一証左である[xxx]。

本稿冒頭でも触れたが，この御供船については西村晃「厳島神社管絃祭御供船をめぐって――広島県城下町祭礼断章」（広島県立文書館 編『広島県立文書館紀要』9 平成19）という先行研究がある。『村上家乗』をはじめとする史料に基づき，御供船の盛衰を藩政との関わりの中で描き出した論考で，御供船が藩や氏子・神社という組織によって運営されたのではなく，町単位で運営されていた事実の指摘をはじめ，多くの示唆を与える論考である。特に御供船の推移を考察するに当たり，御供船が沈滞化する天保年間以降，城下町における町人の活力が本川川ざらえの砂持ち加勢に向かい，その姿はまさに安永 7 年に藩から規制を受ける以前の御供船の様相であったとの指摘は，御供船の本質を考えるにあたって重要な視点を提供しているといえよう。以下，西村の視点を念頭におき明治期以降の御供船について，その実像の一端を繙いていきたい。

5　近代の御供船について

本項は西村の論考を受け，明治以降の流れを繙くが，結論としては住民主体ならではの運営実態と，祭礼に向けたエネルギーが他の祭礼にシフトしていく江戸末期にも見られた姿が明治末期にも見られることを確認する内容となる。

まず明治期以降，御供船を取り囲む環境が衰退を促す方向へ進んでいくのは前述の通りである。江戸末期，既に御供船が減少していったことは先行研究の示すところだが，明治という時代相に加え，旧広島市域を流れる川に橋が架けられ，御供船の航行に困難を生じさせたこと，鉄道の開通と延線により新駅の最寄港から連絡船が運行されるようになり，宮島へ渡航する際に旧広島市域を通過・滞在する必要がなくなってきたこと等の地理的状況変化は衰

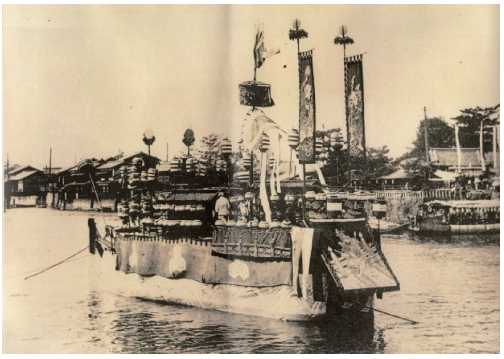
退を促す拍車となった。そうした状況に触れた記事を以下に挙げる。

交通機関の完備せざる以前の当市に在りては，一昨及昨日に於て嚴島管絃祭とし，云はば近郷近在は素より他府県よりの老若男女の当市に来りて，東部は宇品に西部は元安及本川両河より漕ぎ出す和船は，何れも我れ遅れじと先を争ふ客にて好況を呈したれば，是れを見物せんとて出掛る市中の人々も又東西両河に群集せるを例年なりしが，**汽船往復の便あると共に，山鉄の交通開けて以来当市に足を停むるものは年一年その数を減じ来りたれば，随つて当市の旅店，料亭，飲食店その他一般の商家も共に打撃を蒙りたること少からず。**別て茲三四年以来は此の影響殊に著しきを覚え，管絃祭当日と雖，商家は差したる物品の売捌きを認めずして，時には殆んど平日と異なる処なきに至りたるの観ありき（『中国新聞』明治43年７月25日）

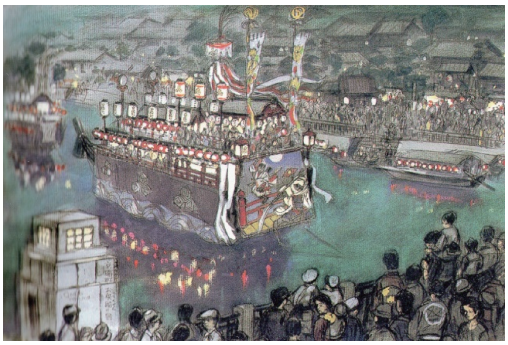
さらに御供船の姿を見る事ができなくなったとする大正４年７月28日の『中国新聞』の記事を挙げる。

嚴島神社管絃祭は関西第一の大祭である。昔は本川（本川橋），元安川（元安橋），京橋川（京橋），猿猴川，天満川（天満橋）等の各川各橋梁の下流に御供船を浮かべて居た。**今は全く廃れた。最も両三年前までは京橋川に一隻これを浮べて僅かに其昔を偲ばせて居たが今はそれすら出ぬ。**而も其満船飾を施した壮厳華麗な態は，実に人目を眩ましむる程の美観であつて，之が為め御供船を浮ぶる町内の出費は又夥しいものであつた

ちなみにこの記事の書かれた大正初頭，そして明治末年以降の時期は，御供船を考える上



【図５】　管絃祭御供船（明治末期）
広島市立図書館 蔵



【図６】　御供船
『四国五郎平和美術館Ⅱ ひろしまの街』（四国五郎画集刊行委員会 平成11）

でも一つの画期となっている。それは，事実はともかく「御供船が無くなった」という認識が登場するようになることである。例えば，前掲の野坂元良もこの大正初期を御供船が見られなくなった時期と指摘しているし，薄田太郎も，明治43年に出た西本川の御供船を，西本川最後の御供船としている。

西本川とは，かつての猫屋橋，すなわち現在の本川橋を，東から渡ったあたりを指す地名である。中国新聞社本社，恵美須神社のある界隈のことで，その前を流れる本川の西側にあたるので西本川という。薄田は『続々がんす横丁』で，明治43年５月15日から12日間にわたり浅野長政公300年祭が行われ，西本川最後の御供船が２隻出たこと，かつて御供船で賑わった京橋川・元安川に朝顔をモチーフにした大きな噴水が作られたことを回顧している[xxxi]。なお『中国新聞』は明治43年，浅野公300年祭典と世界遺産厳島神社の管絃祭が連続したことから，御供船がでなかったことを指摘しているが，薄田による証言と合わせ考えてみると，本川ではそうした明治43年の状況が踏襲され，そのままなくなってしまったことが窺える[xxxii]。

しかし林治子（『わがなつかしの広島』）によると，断定ではないにせよ昭和に入ってもその姿を見ることがあったとあり[xxxiii]，森川修蔵による談話（『芸備日日新聞』大正６年８月４日）を見ても，大正６年当時，幾艘かの御供船が出ていたことを確認できる。よって本川という条件付きならばともかく，御供船の姿が明治末で姿を消したという認識は速断といえる。ただし御供船のアイデンティティーでもある，宮島に渡航し，管絃祭の御供をするといった行為が消失したことで，存在意義が変容したことは重要な事実として認識すべきである。宮島に渡る行為のなくなった時期については定かではないものの，明治27年には堺町の御供船が参詣していることから，明治維新を境に宮島へ渡る御供船が消失したというのは間違った認識である[xxxiv]。

以下，断片的ではあるが明治末年までにおける御供船の様子を繙いてみたい。

江戸期にも天候等の状況により御供船が出なかったことはあるが，明治になっても自然に左右される状況は変わらなかった。例えば旱魃で計画変更をせざるを得なかった明治27年の事例を見てみよう。この年は大旱魃が発生したことから京橋川に井出を設けた為，京橋川を遡って船を係留することができなかったのか，本川を遡り日通寺（広島市東区牛田新町）前を経由し京橋川に移動させている。（『中国新聞』明治27年７月18日）しかし旱魃が凄まじく16日夜の満潮時にいたり，人夫数十名で引上げて移動させたものの，日通寺から少し下手の場所で動かなくなってしまったという。

御供船にまつわる問題は自然災害だけではなく，人間関係においても存在した。その一例が警察との衝突である。これも明治27年のことだが，堺町が出した御供船の係留場所を巡りトラブルが発生している[xxxv]。この年の御供船は京橋町と堺町の２艘で，宮島参詣は堺町のみという年だったが，事件は厳島管絃祭を翌７月19日に控えた18日に起こった。発端は広島水

上警察署が，全船を本川橋と相生橋の中間地点へ移動するよう命じたことだった。堺町関係者は，移動場所は両岸に家屋が密集しており，観客が御供船を十分に見ることができなくなると反対したが警察も譲らなかった。そこで警察は人を集め移動させようとしたものの，時はおりしも干潮に重なったため，船体は浅瀬に乗り上げて動かなくなってしまった。しかし，それにも関わらず移動を更に強行しようとしたため，堺町は「それならば御供船を取りやめる」と主張する緊張状態に突入した。結局，仲介者が入り，現状を認可するものとなったが，住民を運営主体とする御供船ならではのエピソードであろう。

御供船にまつわる問題としては，自粛という側面も見逃せない。明治29年の御供船は京橋町のみだったが，これは「船を出す費用があるならば被害者の救助にあてたほうがよい」といった水害による被災者への配慮による自粛だったという[xxxvi]。また明治33年の７月は，その前月，清で義和団事件が発生したこともあり，一艘も御供船を浮かべることはなかった。同年７月13日『中国新聞』は「例年昨今両日は嚴島神社管絃祭にて本市本川元安川京橋川等には御供船を出も昼夜賑はしく囃立も各地方よりの参詣人引も切られず非常の雑沓を極むるが常なるに本年は清国事件の影響にて御供船も出さず人出も少なく管絃祭の当日としては寂莫なるべし」と様子を伝えている。なおこの年，御座船を曳航する江波村の漕伝馬は，例年通り船を出しており，神事斎行と密接な関係のある漕伝馬と，神賑わいに属する御供船の対比が浮き彫りになっている点は興味深い。

こうした住民達の運営により，御供船は旧暦６月17日の広島の街を彩ったわけだが，それをさらに盛り上げようとする催しも数多く企画された。例えば明治31年は本川に猫野町・塚本町・堺町の御供船が，京橋川に京橋町の御供船が姿を見せているが，この年には宇品町の安達萬蔵が煙花（花火）の奉納を思いつき実行に至っている[xxxvii]。益田久米之助・村田文庫といった人物らが会社や銀行などを回り寄付金を集め，昼は水主町の住吉神社沖合で打ち上げ，夜は元安川と本川に船を浮かべ手花火を打ち上げたことにより，近年にない賑わいを見せたという。

また御供船は管絃祭の時期のみに登場したものではなかった。森川修蔵は，明治40年に皇太子殿下の台覧に供する為，塚本町の御供船が出たことを記している[xxxviii]。なお塚本町の御供船は，藩主のお抱え絵師による天の岩戸を描いた幕と，大鳥居を描いた立派な幟のあるものだったという。

明治末から大正初頭にかけての時期は，明治27～28年の日清戦争，明治37～38年の日露戦争，大正３年には第一次世界大戦が勃発するという慌ただしい時期だったが，御供船はそうした状況の中，命脈を保っていたことが窺える。そして最盛期にはほど遠い様相であるとはいえ，保たれていたその姿が明治末から大正初頭にかけて一つの画期を迎えるのは前述のとおりである。しかしそうした衰退の姿を見て，軍部の影響であるとか管絃祭に対する情熱が

無くなったと見るのは拙速であろう。なぜならばこの時期に，新たに執り行われるようになった祭礼行事があるからである。それが玉取祭（当初は玉取と呼称されていたが，以後は玉取祭と呼称を統一する）と広島管絃祭である。ただし本稿は紙幅の制限から，その前者たる玉取祭を挙げ考察を進めたい。

6　忘れられた旧暦 6 月17日の風景 3　――玉取祭――

平成 2 年，中国新聞は『広島城四百年』（第一法規 平成 2 年）において，後藤陽一の言「軍部に遠慮して市民が自粛したのでは」を引きながら，明治末年まで続いた御供船に関する賑わいが，広島の軍事色が濃くなるのと符合したように廃れていったことを指摘した[xxxix]。しかしこれは御供船に関する状況を理解していないことに起因する誤った分析であろう。なぜならば御供船は廃れたとしても，時期を同じくして旧暦 6 月17日に関わる新たな祭礼行事――玉取祭・広島管絃祭――が誕生しているからである。それも玉取祭は御供船が出された場所の一つ，京橋川でスタートし広がっていったのだから，軍部に遠慮して自粛したという分析が正しければ，なぜそのような新たな祭礼行事が生まれ行われたのか理解できない。

これは御供船という存在を，旧暦 6 月17日，すなわち世界遺産厳島神社管絃祭にまつわる祭礼カテゴリーの一要素として分析すべきものであるにも関わらず，御供船のみに焦点を絞ったこと，さらに御供船が住民主体となっていた部分が大きいにも関わらず，そのエネルギーの動きをとらえなかったことが原因と考えられる。

広島の街において，玉取祭の姿を初めて見出すことができるのは明治44年である。この年は明治43年の浅野300年祭の翌年にあたる年で，京橋町の厳島神社前の明神浜で初の玉取祭が行われただけでなく，水主町の住吉神社でも広島管絃祭が執り行われるようになった重要な年である[xl]。

そもそも旧広島市域で玉取祭というと，世界遺産厳島神社で旧暦 7 月14日に行われる玉取祭を連想するのが一般的である。世界遺産厳島神社における玉取祭は，かつては延年祭と呼ばれ，その内容は旧暦 7 月14日の夜，本社拝殿にある福神像を奪い合うものだった。当日，延年行事が終わった後，福神像を乗せた台が撤去されると，待ちかまえていた褌姿の男たちが福神像を奪い合う光景が有名である。なお現在は管絃祭が行われる旧暦 6 月17日の 2 週間後に行われており，場所も本社拝殿ではなく本殿前の櫓，奪い合うのも福神像ではなく宝珠となっているが，ともかく明治44年の広島において，これを模倣した玉取祭が橋本町厳島神社前の明神浜で執り行われたのである。明治44年 7 月13日に行われた広島市初の玉取の詳細を 7 月15日の『中国新聞』が「京橋河中玉取雑感」詳しく報じているので下に挙げる。

昨紙にも記載した如く一昨十三日を以て挙行本市京橋川の玉取は空前の賑ひであつたことは洽く人の知る処である。主なる情況は已に掲げて置いたが尚当日の雑観を書いて見よう。

▲山の如き人　何分広島あつて以来始めての玉取であるから見物の為め四方から出て来た人の数は**三万余**と注され随つてその雑踏は何とも譬ふるにものがなく橋は橋，河岸は河岸その形なりに人の頭が桃船のように盛られてあつたのは実に一種の奇観で茲に至ると人間が如何に競争心のあると共に趣味を有して居るかゞ判るとは決して理屈めいて云ふのではない。事実は言に玉取で認められる。

▲船と艘　橋上や河岸は已に斯くの如しであるが，今日の状況を見んとて船で出掛たものも中々沢山であつたがそれに例年の**京橋町からの御供船**や東遊郭やその他二三艘の囃子船があつたので一層の美観を添へた。就中東券番の囃子船へは十余の紅裙連が揃ひの派手浴衣に黒繻子の帯を矢の字に髪を島田に結つての夏向き御殿女中風は一寸人目を惹いた。玉取をダシに今日は大いに飲むべしと大船に酒肴を積み料理人までを添へた一連もあるかと思ふと気取つた速成トタン板張りの小船は漕往く処人の笑はぬはなかつたのもその日の愛嬌

▲手拭と褌　我れこそ玉を手に入れて呉れむと前日から腕が夜鳴をした連中スワ合図の太鼓が……と各々の捻鉢巻緊褌一番勢よく河へ飛び込んだが何分多数の壮者が東に西に右に左に押合つたので何時の間にやら手拭は弛む褌はとけるのさへ夢我夢中頓て主人を見失ふた手拭と褌とが柳橋の下手へズンズン宇品の沖合さして流れた数は夥しい。京橋々上の下駄の主人に脱ぎ捨られたのが不思議な程あつたとは如何に混雑したことが想々せられる（以下略）

市内初の玉取祭に３万あまりの人が訪れたことに加え，参加者の手拭と褌が柳橋をこえて宇品の方へ流されていく‥といった臨場感のある描写がなされているが，ここに御供船が姿を見せているのも，祭礼行事において注力する対象が変化していく過渡期の様子が垣間見え興味深い。

明神浜の側には，かつての幹線道路であった西国街道が走る京橋，そしてその隣りには柳橋が架けられている。どちらも現存しているが，現在の様子からこのような盛況を想像するのは難しい。しかし嘉永５年，御供船を観覧する人が多すぎ京橋が落ちた事があるように，そうした雑踏の風景こそ，旧暦６月17日の風景であるといえる[xli]。玉取祭当日の紙面に，明神浜と付近の賑やかな光景が描写されているので，以下に挙げる。

嚴島管絃祭に伴ふ京橋河上の玉取は愈愈本日を以て挙行の筈であるが，時間は午後一時

から四時までゞ，前号の紙上にも記した通り附近の掛出しは席料二三円を以て約束を結ぶもの陸続として応接に暇がない程であるさうだ。殊に玉取には各方面から四十五十の団体を組んで申込むものもあり，又仁保島附近からも盛んに申込んで居るそうであるから本日の活躍は今より思ひ遣られて壮快を極めるであらう。此外同川には華麗なる**御伴**(ママ)**船**がある。又，囃船の数々が河川を徂徠して賑ひを呈し**大鳥居のイルミネーション**，**天使の噴水**，噴水機下の電気の籠燈，将又京橋と柳橋との中央，台屋鼻，猿猴橋の下流に**水中柱**を建て，紅燈数百を点じて四方に垂下し尚猿猴橋々上の中央には更に鳥居を作成して電飾を施し，之に加ふるに京橋猿猴橋とも新に**アーク燈**及び**街灯**を電気会社より寄贈して通行の便を計り，観客の混雑を防ぐといふ事であるから明神社境内に点ぜられたる瓦斯会社の寄贈と相照映して美は益益美を加ふべく，其他荒神町の囃船烟火及び橋本町其他各所に生花の飾附などあれば，本日の京橋河畔及び河上は観覧者の為に前代未聞の雑沓を来すことであらう。尚宝珠を獲得した幸運児に対しては賞品として米二俵を贈与するさうだ[xlii]

御供船は分かるが，大鳥居のイルミネーション，天使の噴水というのはなかなか意表を突くものであり，他にも電気会社やガス会社からの街灯等の寄贈，周辺地域の玉取祭に関連する取り組みはたいへん積極的なものがある。こうした旧暦 6 月17日付近の賑やかな風景だが，良くも悪くも住民主体という性質によるといって過言ではあるまい。なお第 1 回の玉取祭は木原舜次郎が玉をかちとったことが記録されている。

こうした様相を見せた玉取祭だけあって，その途中経過が期待外れの状態であると，厳しい批判も寄せられる。市内初の玉取祭が行われた明治44年から 3 年経過した大正 3 年，広島電鉄会社の主催する玉取祭が御幸橋付近で行われたが，ここで反則と思われるような行為があった。そもそも玉取祭とは，櫓にある玉を落とした上で，その玉を奪い合い，特定地点に運び込むという流れになっており，見どころは，玉を奪い合う褌と鉢巻姿の男たちによる勝負である。明治44年に明神浜の玉取を制した木原舜次郎も，一度，玉を取り陸に上がるも，その玉をめがけて多くの人が押し寄せたことが記録に残されている。そうした玉取祭において，大正 3 年に玉を取った者は，なんと船に乗ったまま玉をすくいあげ，勝負らしい勝負を経ることなく勝ち名乗りを挙げるに至ったのである。これには参加者はもちろん観客も納得がいかない。その様子が以下の通りである。

素より反則にして戦士は勿論，観覧客，審判者側にありても何れも無効と認め，即時行り直しを為す筈にて，交渉中，京橋分署巡査が横合より嘴を容れ「行り直しをする事になれば際限が無いから止さうでは無いか」と飛むだ干渉を試み止むなく中止する事とし，

観客は不平だらだらと退場する有様にて折角の折角の壮挙も竜頭蛇尾に了りたり（『中国新聞』大正３年８月８日）[xliii]

ちなみに大正３年の玉取祭は，８月７日と８日の両日にわたって執り行われ，上記の騒動は７日の玉取祭のものである。このように大盛況だった玉取祭だが，最終日８日，玉取祭の最中に納涼台が川の中に墜落し，４名の負傷者を出す事故をおこしており，混雑の様子の一端をうかがうことができる。

なお，本稿では玉取祭という呼称に統一しているが，『中国新聞』は明治44年の明神浜での玉取祭に関して，祭の文字をつけていない一方，大正３年の玉取祭に関しては祭という文字をつけている。これは大正３年は白神社の神職が神事を執り行っていることから，神事の有無による書きわけかと思われるが，明治44年の神事の状況が不明な為，詳しいことはわからない。

またこの時点における旧暦６月17日の賑わいを俯瞰した際，御供船が姿をひそめていることを確認しておこう。旧広島市全体の状況を報じた大正４年の記事は以下に示す。

広島附近で単に明神さんと云つて居るのは多くは嚴島神社である。祭典は嚴島と同様陰暦六月十七日に行ふて居たが，近年は七月中の望の日から三日目に改ため，市内では**橋本町明神濱の明神社**と**材木町誓願寺の嚴島神社**が最も賑ふ。人々は多く業を休み，各戸提灯を點して賑ひを添へる。そして橋本町明神濱の明神社では今二十八日午前十時から京橋川上流で**玉取**を行ひ夜に入りては十二神祇があり尚ほ同夜は安藝郡牛田村河原及白島神田橋下九軒町河原に於て**火振り**を催す筈である。（『中国新聞』大正４年７月28日）

本稿前半で取り上げた各種風景が大正４年の時点においても，広島の街の風景として存在していること，そして玉取祭がその風景の一部として参入していることが確認できると共に，御供船が描写されていないことに注意を払いたい。

この玉取祭だが，広島電鉄主催の玉取祭が行われた翌々年の大正５年には，市内３ヶ所で催されることになる。場所は橋本町厳島神社前の明神浜，住吉神社と空鞘神社それぞれの社殿前の川中である。大正５年７月16日の『芸備日日新聞』は，大正５年７月15日午前10時から始まった住吉神社の玉取祭を報じ，200名ほどの参加者が集まったこと，大人の玉取祭を２回，子供の玉取祭を１回，実施したことを記事にしている。そして午後１時に空鞘神社でも玉取祭が行われ，昨15日に玉取祭の行われた明神浜では，地元幟町小学校児童300名による子供の玉取祭が実施されること等，旧暦６月17日付近の賑わいを伝えている。

上記の様子をみる限り，御供船は姿をひそめたものの世界遺産嚴島神社の管絃祭にまつわる祭礼が衰退の一途をたどったとはいえないし，明治末から大正にかけて，軍部に対しての

自粛があったとは考えにくい。時代に合わせた形で祭礼の姿が変化した…と見るのが適当といえよう。

む　す　び

本稿は旧広島市域における生活文化の中から宗教文化に注目し，世界遺産嚴島神社管絃祭にまつわる祭礼行事に焦点を絞り，その様相の一端を明らかにしてきた。考察を進めるにあたり，なるべく具体的な姿を把握し全体像を俯瞰できるよう史料を配するよう配慮したが，それに関しては一定の成果を挙げることができたと考える。

考察においては，近代における高ちょうちん・火振りと共に，江戸時代から住民が力を注いできた御供船を扱ったが，明治末から大正初頭という御供船が著しく衰退した時期に，「旧暦 6 月17日における世界遺産嚴島神社管絃祭にまつわる祭礼行事」という視点から，玉取祭や広島管絃祭という祭礼行事が誕生し，住民のエネルギーがシフトする姿を指摘した点は本稿の成果である。

ただし旧暦 6 月17日の様子を俯瞰することを優先した為，各事例についての史料を割愛した点は多い。特に紙幅の制限から，玉取祭と共にエネルギーのシフトした先である広島管絃祭については殆ど扱っておらず，その点に本稿の第一の課題が存在する。（なお，広島管絃祭については，「広島管絃祭の変遷と意義――忘れ去られた広島の記憶」（『広島商船高等専門学校紀要』第41号 平成31）で考察を加えた）

さらに野坂や西村の著述において，御供船の模型が嚴島神社宝物館・宮島歴史民俗資料館に収蔵されていると記されているも，現実には広島市郷土資料館にしか収蔵が確認できない等の事案[xliv]や，先行研究をはじめとする各種情報に訂正すべきもの，もしくは再考する必要のあるものが存在するが，本稿は全体像の俯瞰を優先させ，そうした点を重点的に扱わなかった。これが本稿における第二の課題である。

上記二点の課題をうけ，広島管絃祭をはじめ，各事例についての詳細な事例の提示と分析，そして訂正・再考すべき点の提示を今後の研究課題とし，むすびとしたい。

注釈

i　『広島市史』（広島市 大正11～14年），『新修広島市史』（広島市 昭和33～37）

ii　見やすくするために『日本名所圖會全集 藝州嚴島図絵 上巻』（名著普及会 昭和50）P436～437の図の余白を切り取る加工を加えた。

iii　http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?page_id=25623「中国新聞ヒロシマ平和メディアセンター HP「平和記念公園（爆心地）街並み復元図」

iv　薄田太郎著 薄田純一郎編『続がんす横丁』たくみ出版，昭和48，P196

v 前掲注Ⅳ，P196

vi http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=65406　中国新聞ヒロシマ平和メディアセンター HP「被爆２ヵ月の資料館付近　旧日銀広島支店で写真展示　撮影地の遺構　15日に公開」

vii 厳島神社『嚴嶋』厳島神社，出版年不明，P30

viii 厳島神社社務所編『伊都岐島（改訂版）』厳島神社社務所，平成７，P84～85

ix 西村晃「厳島神社管弦祭御供船をめぐって――広島県城下町祭礼断章――」（広島県立文書館編『広島県立文書館紀要』９，平成19）の P77で，管絃祭を「対岸の地御前神社の神に会いに出向いた厳島神社の祭神市杵島比売命を管絃船で迎えに行く祭事である」とある記述のこと。

x 向田裕始「瀬戸内の市杵島姫伝説と管絃祭」（『厳島信仰事典』戎光祥出版，平成14）に詳しい

xi 薄田太郎著 薄田純一郎編『がんす横丁』たくみ出版，昭和48，P163～164

xii 三宅克吉「廣島歳時記」（『鶏肋集』昭和５）P146

xiii 広島市公文書館編『図説広島市史』広島市，平成元，P102

xiv「六月十六夜廣島本川口の圖」（『日本名所圖會全集　藝州嚴島図絵　上巻』名著普及会，昭和50，P426～427）

xv 前掲注Ⅻ，P142

xvi 熊見曲水（『尚古』第２年３号，明治40）P36

xvii 小鷹狩元凱『自慢白島年中行事』（『元凱十著』弘洲雨屋，昭和５）P22

xviii 薄田太郎著 薄田純一郎編『がんす夜話』たくみ出版，昭和48，P149～150

xix 前掲注ⅩⅦ

xx NHK 広島編『わがなつかしの広島』広島地域社会研究センター，昭和55，P102

xxi 前掲注ⅩⅧ，P150

xxii 前掲注ⅩⅦ，P22

xxiii 前掲注ⅩⅥ，P36

xxiv『知新集』（『新修広島市史』第６巻，広島市，昭和34）P159

xxv『広島市史（復刻版）』第２巻，昭和47，名著出版，P145～147

xxvi 野坂元定「厳島神社の神事と芸能」（『厳島民俗資料緊急調査報告書』広島県教育委員会 宮島町，昭和47）P227

xxvii 前掲注ⅩⅩⅥ，P228

xxviii 広島市教育委員会『広島市の文化財　第１集　民俗資料　かき・のり・民俗信仰』昭和46

xxix 前掲注ⅩⅩ，P59

xxx 野坂元定に関しては前掲注ⅩⅩⅥ，P228。明治以降において戻り客のために御供船を浮かべていたことを示す根拠は『中国新聞』（明治27年７月20日）など。

xxxi 薄田太郎著 薄田純一郎編『がんす横丁』たくみ出版，昭和48，P19

xxxii『中国新聞』（明治43年７月25日）

xxxiii 前掲注ⅩⅩ，P59

xxxiv「宮島参詣は唯堺町の分一艘のみなりし」（『中国新聞』 明治27年７月20日）

xxxv『中国新聞』（明治27年７月20日）

xxxvi『中国新聞』（明治29年７月28日）

xxxvii『中国新聞』（明治31年８月４日）

xxxviii『芸備日々新聞』（大正６年８月４日）

xxxix 中国新聞編『広島城四百年』第一法規，平成２年，P16

xl 当初は玉取と称されていたが，後に玉取祭と呼称が改められるが，本稿は呼称を玉取祭に統一する。

xli『広島市史（復刻版）』第３巻（昭和47，名著出版）巻 P419や『新修広島市史』第４巻（広島市役所，昭和33）P335に京橋が落ちた記載がある。

xlii 訂正記事の箇所は省き，適宜句読点を加えた。

xliii 適宜句読点を加えた。

xliv 御供船の模型については，現在確認できるのは広島市郷土資料館のみである。野坂元定「厳島神社の神事と芸能」（『厳島民俗資料緊急調査報告書』広島県教育委員会 宮島町，昭和47）では厳島神社の宝物館，西村晃「厳島神社管弦祭御供船をめぐって――広島県城下町祭礼断章――」（広島県立文書館編『広島県立文書館紀要』９，平成19）と「写真構成・管絃祭のすべて」（野坂元良編『嚴島信仰事典』戎光祥出版 平成14）では宮島歴史民俗資料館になっているも，筆者が平成30年に確認したところ，両施設とも収蔵は確認できなかった。

Summary

On the festival events related to the Itsukushima Kangen-sai in the old Hiroshima city area

——Taka-chouchin, Hifuri and Otomon-bune in modern times and the occurrence of new festivals——

Goichi Nakamichi

This paper examined the living culture of the old Hiroshima city area that was lost by the atomic bomb exploitation from the aspect of religious folklore and religious culture centered on Shinto.　Its feature is that it focuses on festival events related to the World Heritage Itsukushima Shrine Kangen-sai festival around the June 17 of the lunar calendar.

Why can festivals related to the Kangen-sai around the 17th lunar calendar in old Hiroshima city area be a material to focus on.　It is a day on which the Kangen-sai is held at the World Heritage Itsukushima shrine on June 17th, and various related festival events were performed grandly in the old Hiroshima city area as well.

Night on the 17th day of the lunar calendar, a Kangen-sen carrying a performer departs from Miyamajima in order to comfort Kami, a festival with the action as the main axis returning to Miyajima, playing music through Zigosen on the other side, and many people see their appearance.

Regarding this Kangen-sai, there are results such as Motosada Nozaka, the prime minister of Itsukushima Shrine「Shinto ceremonies and performing arts in Itsukushima shrine」(『Itsukushima folklore material emergency research report』Hiroshima prefectural board, Miyajima cho,1973).　However, regarding the festival events related to the 17th day of the lunar calendar in the old Hiroshima city area, apart from the regional history such as『History of Hiroshima City』and『New History of Hiroshima City』, Akira Nishimura「On the Sea of the Itsukushima Shrine Kangen-sai Otomon-bune —— Castle Town in Hiroshima Prefecture Festival declaration ——」(Hiroshima pref.　Documentary edition『Hiroshima prefectural documentary bulletin bulletin』9 Heisei 2007), there is a consideration of the Otomon-bune, the previous research is extremely poor.　And there are also few studies dealing with religious folklore in the old Hiroshima city area, and this article includes the significance of clarifying the actual

state of faith in the festival at the festival of World Heritage Itsukushima Shrine, folk culture and religion in the old Hiroshima city The significance of elucidating the actual state of culture will be recognized.